

月から来た豚

福田鼠

月から来た豚

※

豚のお父さんは月の運転手をしている。そのまたお父さんも、そのまたお父さんも月の運転手だった。

ひょっこり伸びた、潜水艦みたいなのぞき穴から外を見て、地球から離れすぎず、近付き過ぎないように。

月は、三十台ある。満月、半月、三日月、にたにた笑った猫の目みたいな月。みんな木星のリングにとめてある。

毎日、その一台をワープホールで取りに行っては、地球の周りを一周。そして、また別の月を。

豚は小さな頃から、それを見ていたけれど、いよいよ退屈になってしまって。

月から出ることにした。

※

男の子は、夜が怖かった。小さい頃、身体が弱くて、よく夜に病院に連れて行ってもらった。その病院の廊下には、なぜだか壁一面、ずらりとレントゲン写真が並んでいた。

それが怖くって夜が怖くなった。

特に、月が青っ白い夜は、空一面がレントゲンみたいでたまらなかった。

男の子は、時々、夜に目を覚ますと、自分のベッドじゃないところにいることがあった。夢の中を歩いているつもりが、気付かないうちに本当に立って歩いてしまう。

そういうクセがあった。

だから、初めて、月から来た豚を見たときだって、夢の続きだと思った。

だって、豚はほんの少し、にぎりこぶし程だけど、地面から浮いていたんだもの。

※

「やあ、僕は月から来たんだ」

ぷかぷか浮かぶ豚は言った。

「ウソだ。月にいるのはウサギだよ」

「月のウサギは昔は地球にいたんだよ」

豚は浮いたまま、男の子の歩く隣をついてきました。暗い夜だったけれど、豚のおかげか男の子は怖くありませんでした。

「昔、亀との競争に負けて、シーソーで飛ばされちゃったんだ」

「その競争なら、僕だって知ってるよ。ウサギが途中で眠っちゃったやつでしょ。ウサギが悪いよ」

「仕方ないよ。そういうハンディキャップ付きで受けたレースだったんだから。ウサギは勝つために走るんだ。誇りを持って、走り続けていた。だから、どんなに不利なレースでも、挑戦されたら受けないといけなかったんだよ」

「ウサギは月では走らないの？」

「もう、走る相手もないから。お餅をついてるよ。奥さんと二人で。どこか寂しそうなときもあるけど、二人はとても仲良くやっている」

※

そんな話をしていると、男の子と豚は、どこか広い、月明かりに輝く草原に着いていました。草原の真ん中では、キリギリスが、とても良い声で歌っていました。

「やあ、今晚は」

豚は、親しい友だちに話しかけるようにあいさつしました。

「やあ。大声で歌ってごめんよ、迷惑だった？」

キリギリスは申し訳なさそうに小さくなって言います。

「そんなこと無い。とても良い声だったよ」

男の子は思ったとおりに言うと、キリギリスは少し照れて、

「そんな風に誉めてもらったのは、初めてだよ」

※

キリギリスは、小さな頃から、鳥の歌を聴いて育ちました。お父さんも、お母さんも、気付いた頃にはいなかったけれど、綺麗な歌を聴いていると、何も怖くなかったし、温かい気持ちになれました。

綺麗な歌声というのは、とても素敵だと思いました。

キリギリスは歌の練習を一生懸命に始めました。

だけれど、いくら練習しても、鳥のような美しい声は出ません。

それでも、練習しました。

「馬鹿なヤツだ。どんなに練習したって、鳥さんのような良い声が出せるわけがないのねえ」

草原の人たちは、みんな言いました。

「ねえ、君、歌の練習も良いけれど、もうすぐ冬だよ」

アリたちは、たくさんの食べ物を抱えながら、意地悪く言いました。

キリギリスも、何となく分かっていました。

自分には鳥のような声は出ないこと。

お父さんとお母さんは、冬を越せなくて、死んでしまったのだということ。

「森の音楽隊に入れてもらえたら良いんだけど。すごく歌の上手な鳥たちで、メンバーは満員なんだ」

キリギリスは悲しそうに言いました。

「確かに、鳥とは違うけれど僕はとても素敵な声だと思うけどな」

男の子が言うと、豚も優しくうなずいて言いました。

「僕らについておいで」

男の子と、月から来た豚、歌うキリギリス。

三人で、どンドン、月光りのする、風の吹く草原を歩きます。

※

草が途切れて、ごろごろした岩を歩いて。

「ねえ、ぶた。ぶたはどうして地球に来たの？」

男の子はふと気になって聞きました。

「退屈だったんだ。ただ、お父さんが月を運転するのを横で見てばかり。いつかは、僕も、ずっと運転ばかりし続ける」

「月を運転？ 何のためにそんなことするんだい？」

「どうかな、僕も本当のところは分からないけど。でも、多分、月を止めてしまったら大変なことになるんだよ。地球が大爆発しちゃうとか、そのくらい大変なこと」

男の子は、急に怖くなりました。

周りを見ても真っ暗な夜。夢にしては長すぎる。どこか、あまりに遠くて知らない場所。

でも、後ろから、ギリギリの歌が聴こえて、前を見るとぶかぶか浮かぶ豚の背中。

不思議と誰かが手をつないでくれているような気持ちになって。

三人は夜を、ずんずん、歩きます。

※

そうして、三人は、いっぱいにお茶碗の積もった山に着きました。

妙に暗くって、風のない、寂しいところ。

「どうして、こんなにお茶碗が山になってるんだろう」

男の子が豚に聞くと、

「それは、僕たち、欠けてしまったからだよ」

足元のお茶碗が代わりに答えました。

「ここは欠けてしまったお茶碗が集められる場所なんだ」

豚は悲しそうにいいました。

男の子はどうしようもなく悲しい気持ちになりました。どこかに逃げ出したいくなりました。

でも、豚は、何も言わず。お茶碗を一つ拾うと、どんどん前に行ってしまう。ギリギリも歌をうたいながら、お茶碗を一つ拾って。

男の子は、どうしようもなく怖かったけれど、二人のまねして、お茶碗を一つ拾って後を追いかけてました。

すると、お茶碗が、ありがとうと言って、男の子は、また怖さを忘れることができました。

※

お茶碗の山の隣に、小さな小屋があって、真っ暗な夜に温かい光がもれていました。

「今晚は」

豚は小屋に入っていきます。キリギリスと男の子も続きます。

「こんばんは」

中では女の子が、木の机に向かって座っていました。

女の子は、何か光の棒みたいなものを両手に持って、机の上に欠けたお茶碗をのっけて一生懸命。

「何をしているの」

男の子が聞きます。

「お茶碗を直しているの」

女の子は答えます。

豚は、さっき拾ったお茶碗を女の子に渡しました。

代わりに、女の子は修理したばかりのお茶碗に、お茶を入れて、豚にあげました。

※

豚の渡した欠けたお茶碗を修理してもらおうと、今度はキリギリスが、その直ったお茶碗にお茶を入れてもらいました。

キリギリスの渡した欠けたお茶碗を、女の子は修理して、男の子にもお茶を入れてあげました。

「こんなところで、寂しくないの？ 一人きり？」

女の子の部屋には、本当に椅子と机、そして欠けたお茶碗と直ったお茶碗、そして、お茶の入ったやかんしかありませんでした。

「一人きりよ。でも、仕方がないの。誰もお茶碗を直す人がいなくなっちゃったら、それこそもっと寂しいことだから。欠けたお茶碗はずっと山になっていくばかり。どんなお茶碗もいつか変えてしまうでしょ。誰も直さず、山ばかり大きくなるのは、とても寂しいわ」

とても美味しいお茶で、キリギリスはお礼に、と。

歌をうたいました。

「なんて素敵な歌。ずっと聴いていたい」

女の子は言いました。

「そうだろう。とても素敵な歌だろう。それでここまでやって来たんだ。良かったら、冬の間、ここにキリギリスを置いてあげてくれないか？」

豚は言います。

「ぜひ、いて欲しいわ。いてくれる？」

キリギリスは嬉しそうに答えます。

「僕の歌声を求めてくれる人のためなら、僕はいつまでも歌い続けます」

※

女の子は喜んで、キリギリスはとっても嬉しくて。

豚と男の子は、お茶碗持って、また夜を歩きます。

「ねえ、豚、君といると夜が怖くないよ。何も怖くない。いつまでも、どこまでも、一緒に歩いていたいな」

「いや、僕は月に帰らないといけない」

「豚にしても、女の子にしても、キリギリスにしても。みんな、どうして、そんな冷たくて、寂しいことをしなくちゃいけないんだい？ みんなすごく良い人なのに」

豚は、黙ってしまって、肩を落として歩きます。

豚も、本当は月に帰るのが寂しいのです。

それでも、青っ白く光る竹やぶを抜けると、金色に光るシーソーがありました。

「帰らなくちゃいけないんだ。君も僕も」

豚は言いました。

「また遊びに来てくれる？」

豚は何も言わずシーソーに腰掛けました。

「もう、遊びには来れないと思う」

男の子はとても悲しいと思いました。

「じゃあ、会えなくなっても、ずっと友だちでいてくれる？」

豚はとっても嬉しく思いました。だって、豚にとって初めての友だちでしたから。

「もちろん。僕や、キリギリス、女の子のことを忘れないでいてくれるかい？」

「もちろん、みんなずっと大事な友だちだよ」

二人で、女の子からもらったお茶碗に、竹の葉からしたたり落ちてくる青っ白く光るしずくを集めました。飲むと、体のずっと奥のどこまでもしみ込むようで、大変気持ちの良いものでした。

豚はシーソーの片側に乗って、反対側を指差して言いました。

「あっちの岩から、そこに、どん、と飛び降りてくれないかい」

男の子が岩に登って、準備してしまうと、豚は大きな声で、

「ありがとう」

と言いました。

男の子も、「ありがとう、ずっと友だちだよ」と言うと、豚は嬉しそうに、もう一度。

「ありがとう」

男の子は岩からジャンプします。

随分、高い岩だったけれど、何も怖くもなかったし、心配もありませんでした。

どん。

豚はみるみる空に飛んで行きました。

同時に、男の子の方のシーソーは底が抜けてしまって。

男の子は、どんと地面の中へと落っこちて行きました。

※

男の子が、目を覚ますと、お父さんとお母さんが、すぐ横にいて。でも、まったく知らない部屋のベッドの上でした。

お父さんとお母さんは、男の子が目覚めたことに気付くと、泣き始めました。

「どうしたの？」

男の子が聞いても、二人は、「良かった、良かった」とばかり言って泣いていました。

白い服を着たお医者さんが入って来て、病院だと分かりました。それで、ちょっぴり怖くなりました。

ベッドのわきのテーブルに、お花があって、その花瓶が女の子のくれたお茶碗の色によく似ていました。さわってみると、温かくて、怖くなくなりました。

女の子の直してくれたお茶碗だと、男の子は思いました。

男の子は、大事な友だちたちをずっと覚えていようと、もう一度深く思っ

「ありがとう」

と言いました。

おしまい。